
水上の綾

白石ライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水上の綾

【Nコード】

N1396BA

【作者名】

白石ライ

【あらすじ】

現代日本に少し似た、架空の国の物語。国の最高位の人達を巻き込んだ、ただの意地っ張り女×意地っ張り女の友情(?)の物語。

第一話

広大なりカー大陸より北東に海を渡った先に浮かぶ小さな島。そこに「綾見^{あやみ}」という国が誕生してから、およそ千二百年を超える年月が経っていた。神力を持つ巫女によって興されたその国は、建国の巫女亡き後、政治を司る機^{はたの}の一族と、祭祀を司る織^{おりえ}の一族、この二本柱によって、現在まで変わらず国が治められている。

代々機の直系から選ばれる皇帝に対して、織には直系の女から選ばれる巫女姫という役職がある。これは神に仕える職務の最高位であり、年間を通して、神祇官らと共に様々な祭式を執り行う。時が流れ、かつての神力は失われたものの、国民からは国の象徴として篤く敬われ、皇帝を凌ぐほどの人気を誇っていた。

今代の巫女は、代替わりしてまだ八ヶ月足らずと経験は浅いが、大層美しく、肅々と儀式を執り行う姿はまさに国の象徴に相応しいと国中の評判で―――。

年も暮れ行く冬の未明。神宮の一日はまだ日も昇らぬうちから始まる。内宮、巫女姫の居室としてあてがわれた一角。吐く息を白く凍らせる廊下を、千^{せん}は足早に過ぎていった。目的の一室に着き、襖の前で膝をつく。

「姫様」

声をかけるが、応答は無し。いつものことなので、特に気にはし

ない。

「失礼いたします」

部屋の主は聞いてなどいないだろうが、声をかけるのは忘れない。襖を開けると、薄暗い部屋の奥の方に、布団にくるまって丸まる何かが見える。千はそつと部屋に入り、エアコンのスイッチを入れた。

建国から千二百余年。科学技術は日に日に進んでいる。神宮とて例外無くその恩恵を受けているのだ。伝統が集結する場所として譲れない部分は守りつつ、時代の移り変わりを拒絶しない。柔軟に対応してきたからこそ、千二百年もの長きに渡って、国の柱として在り続けてこられたのだ。

そもそも、エアコン無しの部屋で暮らせと言えば、この部屋の主は三日で逃げ出したに違いない。

千は布団の塊に近づく。その途中で、布団の外に転がっている枕を拾った。主の寝相の悪さは今に始まったことではない。

「姫様。起床のお時間です」

塊に向かって声をかける。くぐもったうめき声が聞こえた。しかし塊は動かない。

千は気にせず、着替えの準備を始めた。新しい下着、朝の祈祷の際の礼服、足袋などを出し終わったところで、再度塊に声をかける。

「姫様」

「……ああ？」

布団の中から、実に不機嫌そうな女の声が聞こえた。

「そろそろ起きて下さいね」

「わかった……」

絶対わかってない。その証拠に塊はぴくりとも動かない。しかし千は焦らない。コツはこうやって徐々に覚醒へと導いていくことだ。焦って無理矢理起こしては後で恐ろしいことになる。

次に千はバスルームへ向かった。ぬるいシャワーにかかり、次いで真水で禊みづぎをするのが、姫の朝の習慣だ。朝の禊は巫女姫には避けられないものである。そのための準備を整えてから、部屋に戻った。室内が暖まってきたことよって、小さく縮こまっていた布団の塊がだんだん伸びてきていた。

「姫様。シャワーの準備もできていますよ。そろそろ起きて下さい」「あと十分……」

「だめです。早くしないと朝の祈祷に間に合いません」「じゃあ五分……」

なかなかしぶとい。と思っていたら、部屋の隅に放り出されているゲーム機とコントローラーを見つけた。

「姫様……。もしかして、また夜更かししてゲームをなさっていたわけではありませんよねえ……。」

知らず、千の声も低くなる。

「年末年始は忙しいので、しっかり睡眠を取られるよう、あれほどお願いしましたのに」

「必殺技覚えたー……」

「聞いてません。さあ、そろそろ本気で起きて下さい。あと五分寝るのと、今起きるのと、そう変わりませんよ」

少し間があって、チツと舌打ちが聞こえたかと思うと、やっと思わずると布団から這い出てきた。

ボサボサの黒髪、寝起きの顔は不機嫌丸出しのひどいもので、折角の美人が形無しである。この姿を写真に収めて国民に見せても、誰もこれがあの巫女姫・春比奈はるひなだとは信じまい。人々にとっての彼女とは、神に祈りを捧げているときの、あの神々しいばかりの横顔だとか、あの美しい舞姿なのだ。

春比奈姫はもう一度舌打ちを下さって、ふらふらとバスルームへ消えていった。

春比奈は実に寝起きが悪い。中々起きない上に、起きたかと思えばものすごく不機嫌だ。千にはそう大したことには思えないのだが、ほかの近侍にしてみるとそれはそれは恐ろしいらしく、誰も進んでこの仕事をやろうとしない。いつも春比奈の起床時刻が近づくと、誰もが忙しいふりをして、千に押し付けようとするのだ。別に春比奈とて悪気があるわけではなく、たとえ夢から覚める瞬間だけは、自分の眠りを妨げる相手を心底憎んでいたとしても、完全に目を覚ました頃にはもう忘れている。だから気にする必要は無いと思うのだが、慣れてない者にとっては、あの舌打ち一つで寿命が縮むのだとか。

というわけで、今のところ、春比奈を何とかバスルームまで送るのが、千の一日の最初の仕事だった。

第二話

年の暮れから正月にかけて、この神宮はとにかく忙しい。特に大晦日から一月七日の^{じんじつ}人日の節句までの八日間は、連日儀式や宴があり、息をつく暇も無い。現在は、その準備に追われる毎日だ。

千は、春比奈の朝餉の膳を取りに、厨房へ向かった。途中、忙しく立ち働く人々に、おはようございます、と軽く頭を下げる。しかし返ってくるのは余所余所しい視線だけだった。明らかに避けられている。侍従職に就いている人の中で、千とまともな会話をするものはおらず、嫌われていると言ってもいいのかもしれない。

原因は、理解しているつもりだった。しかしそれを気にしてはいない。現状を変えたいとも特に思わない。他人の評価が欲しいわけではないのだ。千は自分の意思で宮に居る。ここで巫女姫の近侍としての務めを果たすことだけが、千の望みだった。

「大野」

春比奈の私室へ向かう途中で、後ろから声をかえられた。振り返ると、略式の式服を纏った青年が近づいてくるところだった。整った顔立ちからは、どこことなく軽薄な印象を受ける。

「おはようございます、明日^{あすら}良様。お勤めご苦労様です」

盆を持っているため深々とはできないが、千はお辞儀をした。明日良は織の本家の人間で、今は大学生だが、来年からは神祇官として神宮に勤めることになっている。現在も両手に書類を抱え、忙し

そうだ。宮の頂点に座する巫女姫からアルバイトの清掃係に至るまで多忙を極めるこの時期、本家の者として例外ではない。

「……何か御用でしょうか」

千がそう尋ねたのは、明日良が眉をひそめて千を見つめながらも口はつぐんだままだったからで、しかし彼は短くため息をつけてその表情を打ち消し、言った。

「今日のスケジュール、ちょっと変更があるから春比奈に伝えたい。市役所のお祓いの後に予定してた元日の衣装合わせ、明日に回してくれて。午後は予定通り、還元の儀の舞のリハね」

「はい」

明日良は春比奈の従兄で、年が近いこともあって仲が良い。明日良に限らず織の者はみな、公の場以外では春比奈のことは呼び捨てで、普通の親戚の一員として扱う。

「俺が直接行こうとも思っただけど。俺これから会議に参加しなきゃなんなくて。よろしく。それと、あいっちゃんと睡眠と栄養しつかり取ってる？　なんか今日うっすら隈があった気がすんだけど」

「それは……」

痛いところをつかれた。

「実は、昨夜遅くまでゲームをなさっていたらしく」

わざわざ言われなくとも、主の健康管理は近侍の務めだというのに。近侍として恥ずかしい。と反省していると。

「あ、ごめん。多分それ、俺が貸したヤツだわ」

「……は？」

どうやら元凶はこの人のようだ。

「絶対面白いからやっつけて、オススメしといたんだよ。あれやり出すとハマっちゃうんだよね。必殺技覚えるまでは！　ってずるずる続けちゃって、中々止めらんなくて」

さすがは従兄、似た者同士か。

「……せめてこの繁忙期が過ぎるまでは、没収させていただいても？」

「あー、うん。頼むわ。あいつのためにも。そしてそのまま大野が預かつといて。俺のためにも」

「畏まりました……」

なんて自制心の無い人たちだ。

少し悲しく思っていると、明日良がまた、言いたいことを無理矢理飲み込んでいるような顔でこちらを見ていた。

「どうかなさいましたか、明日良様」

「……………いや。何か、大野からそういう言葉づかいされると、変な感じがして。前みたいにな、先輩って呼んでくれりゃいいのに」

明日良は少し苦笑いだ。千は目を伏せて言った。

「今の私は、織の家の方々に、お仕えする身ですので」

斜め上からの視線を感じる。恐らく明日良にとっては、千がそうやって言うことさえも納得がいかないのだろう。これ以上何かを言われる前に、辞することにした。

「それでは明日良様。姫様の朝餉が冷めてしまいますので、失礼させていただきます。ご伝言、確かに姫様にお伝えいたします」

明日良の方を見ないまま一礼して、その場を離れた。角を曲がるまで、視線は離れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396ba/>

水上の綾

2012年1月4日13時48分発行